

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

バトゥパハツ（ジョホール州）のハリラヤ・ハジ

田村慶子（北九州市立大学大学院社会システム研究科）

イスラム教徒にとって、イスラムのお正月（ハリラヤ・プアサ）と同じくらい犠牲祭（ハリラヤ・ハジ、聖地巡礼祭とも訳される）は大事な祝日である。メッカに巡礼する月の最終日を祝うのがハリラヤ・ハジで、ハリラヤ・プアサの約 2 ヶ月後にハリラヤ・ハジがやってくる。なお、2015 年のハリラヤ・プアサは 7 月 17 日、ハリラヤ・ハジは 9 月 24 日である。

ハリラヤ・プアサはテレビなどで大々的に報道されるが、ハリラヤ・ハジの様子はあまり知られていないように思われる。ここではジョホール州第二の都市バトゥパハツ（Batu Pahat）のイスラム教徒がどのようにハリラヤ・ハジを祝ったのかを、11 年の事例であるが紹介したい。

11 年のハリラヤ・ハジは 11 月 6 日で、マレーシア政府公務員である私の友人は 4 日から 5 連休を取って、クアラルンプールから故郷バトゥパハツに帰省した。友人は、研究休暇で当時シンガポールに滞在していた私をハリラヤ・ハジに誘ってくれたので、私はシンガポールから高速バスで 5 時間かけてバトゥパハツに向かい、彼の地域のハリラヤ・ハジに参加させてもらった。

この年は彼の地域では近隣住民が共同で 6 頭の牛を購入、10 日間ほど協力して飼育したそうである。ハリラヤ・ハジの早朝、みなでお祈りをした後に、空き地にブルーの大きなビニールシートを敷いて牛の解体が始まった。解体作業に従事するのは男性ばかり 20 人ほど、毎年のごとで慣れているのか、それぞれの役割分担が決まっていた作業は流れるように進み、6 頭の牛は 4 時間ほどで解体された。皮や角、骨、頭は業者が引き取るのだそうで、食用に適さない一部の内臓はそのまま地中に埋められた。小分けされた肉は小さなビニール袋に入れて各世帯に配るほか、作業に参加できない母子世帯や障害者世帯にも配るといふ。

夕方、友人の家で新鮮な牛肉を野菜とともに煮込んだシチューを食べた。味付けは少量の塩だけであったが、これまで食べたどのシチューよりも美味しかった。その後は近所の人に次々と招待され、お腹が破裂するのではないかと思うほど美味しい肉をたらふく食べたことは、今でもいい思い出である。

このようにマレーシアの地方都市では未だに地域社会のつながりが強く、ハリラヤ・ハジは地域住民が互いの絆を確認し、親睦を深める機会にもなっている。



手際よく牛を解体する男たち（筆者提供）

一方、隣国シンガポールのハリラヤ・ハジはモスクのなかで行われる。この年はオーストラリアから空輸された 200 匹の羊と 1500 匹のヤギが、24 のモスクと 2 つのイスラム教徒団体の敷地で解体され、国中のモスクで待つイスラム教徒に配られた。もっとも一部の羊が暑さのために飛行機の中で衰弱死してしまい、同じ飛行機で運ばれて生き残った羊が何らかのウイルスに感染しているのではないかという不安が起こったり、不足分をどこから緊急輸入するのかという問題が起こった。都市化が進み、バトゥパハツのように地域住民が短い期間ながら飼育した家畜でハリラヤ・ハジを祝うなどということが不可能になったシンガポールならではの事件であった。

< 筆者紹介 >

北九州市立大学大学院社会システム研究科教授。専攻は国際関係論・地域研究（特にシンガポールとマレーシアの政治、社会、ジェンダー研究）。主要業績に『多民族国家シンガポールの言語と政治：「消滅」した南洋大学の 25 年』（明石書店）、『シンガポールを知るための 65 章』（明石書店、編著）、『東南アジア現代政治入門』（ミネルヴァ書房、共編著）、『シンガポール謎解き散歩』（中経文庫、本田智津絵との共著）など。